お茶の水地理　第29号　1988年

尾西地方における毛織物工業の発展と変容

青　木　真　里

愛知県北西部，木曽川左岸一帯の濃尾平野に広がる尾西地方は，洋服地生産を中心とする，わが国の一大毛織物工業地域を形成している。本研究では，尾西毛織物工業の形成過程を明らかにするとともに，需要動向や国内・国際の経済動向に伴う今日の産地構造の変容を明らかにすることを目的とする。

尾西毛織物工業の形成の基盤となったのは，近世，特に江戸時代，木曽川沿岸の自然堤防上で行われた綿の栽培とともに農村家内工業として飛躍的に発展した綿織物業により，尾西地方がすでに当時，機業地域として成立していたことに溯る。しかし，明治24年の濃尾大地震を境に，綿織物や絹綿交織物は後退する一方で毛織物の製織にとりくみ，やがて大正時代から昭和にかけて毛織物を増大させ，尾西機業地に毛織物工業を確立・形成していった。そして，昭和に入って間もなく，和服地の着尺セルをしのぎ，毛織物洋服地の生産が国内需要の増大や織機設備の近代化に伴って飛躍的に伸び，「毛織物王国」に発展していった。だが，第一次オイルショック以降は，長期的な繊維不況に陥り，大幅な規模縮小の傾向にある。現在，尾西山地では，昭和55年頃を不況の底とし，天然繊維ブームや消費市場の多様化・短サイクル化・高級化に適応できる伝統的な産地生産構造，日米繊維政府間協定後の輸出量減少に伴う内需中心の生産体制などにより，毛織物生産は好調である。

毛織物工業の生産構造において，特に，尾西地方では，原糸から生地の生産まで産地内で加工できる毛織物と紡績・撚糸・染色整理等の関連業種が密集しており，工程別分業による加工委託関係を保っているとともに，織物工程内においては，商品企画や見本作成，販売，生産の指示を行う「親機」と，下請的製織工程のみを受け持ち工賃加工を行う，家族経営主体の零細な「出機」の関係により，流行や需要量の増減に対応しやすい体制をなす同一工程内の分業関係が確立しており，いわゆる「一貫生産基地」を形成し，尾西毛織物工業の発展・存続に大きな意義をもつ。

ところで，尾西毛織物産地は，ここ数年の間に産地構造の変容が顕著であり，構造転換の時期にあるといえる。

第一に，梳毛紳士物の退潮とともに，紡毛婦人物の伸びが著しい。これは主に，紳士物より婦人物がファッション性・多様性を求める需要が多い今日，出機企業に依存する多品種少量生産体制が整う当産地でその生産が可能であることが考えられる。

第二に，下請依存体質の定着と過剰生産対策の常態化である。若年労働力不足やコストアップ，多品種少量生産，短サイクルなどの諸対策として下請依存は高まるとともに，昭和54年より始まった設備共同廃棄事業による過剰毛織機の買上廃棄がなされ，低工賃収入の賃機の転廃業の促進と下請賃織の織工賃収入の増大をもたらしている。

第三に，織機所有台数の減少の反面，ここ数年における超自動織機の導入による省力化経営や新分野製品の開発が目覚ましい。

そして，第四に，生産主体となる労働力においても，企業規模が縮小し，ますます生業的な家族経営に依存する零細化が進み，これは，現在，経営者の交替期にある後継者問題ともからんで，さらに，零細な下請出機に製織生産を依存する毛織物生産体制の存続自体に大きく関わる重要な問題をひきおこすことになるものと思われる。

尾西毛織物産地において，このような国内経済や消費者ニーズの動向に伴う産地構造の変容はまた，今日では，円高やアジアNICSの繊維工業への進出といった，国際経済の動向も今後大きな影響進出を及ぼされることにも留意しなければならない。したがって，今後は，長期的な展望にたち，織物関連業種との相互関連により一貫生産する総合繊維産地の継続，あるいは，消費者ニーズを把握し，付加価値の高いファッション性をとり入れたファッション織物産地づくり，毛織物生産を基幹産業とする地域との協力等が課題となるであろう。